

# 第1章 幼児教育と小学校教育の連携・接続について

## 1 幼児教育とは

### (1) 幼児教育の基本

幼児教育は生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とします。

### 遊びを通した学び\*

『健康（心身の健康）』『人間関係（人との関わり）』『環境（身近な環境との関わり）』『言葉（言葉の獲得）』『表現（感性と表現）』の5領域のねらいを踏まえ

保育者が『幼児が遊び込むことができる(学びに深さと広がりをもたらす)環境』を構築



遠足で草やでこぼこ土の上を歩く

おととと。  
転びそうになっちゃった。  
りんごを持って歩くのは難しいな。



異年齢保育

ドゥスンドゥスン、  
恐竜さんだよ。  
怖くないよー。



寒い日の外遊び

ぬらしたタオルが  
凍ったよ！  
なんで？



動物園見学

絵本のくまより大きいなあ。  
明日はくまの絵を描きたいな！  
くまって、どんな声？



お店屋さんごっこ

はい。これどうぞ。  
(近所の店員さんを真似してみたよ)

「個別最適な遊び」「協働的な遊び」\*がいっぱい

学びの  
芽生え\*

がいっぱい

生涯にわたる人格形成の基礎を培う

## (2) 幼児教育施設での生活で見られるようになる幼児の姿

各幼児教育施設で、幼児期にふさわしい遊びや生活を積み重ねることにより、次のような「幼児教育において育みたい資質・能力\*が育まれている幼児の具体的な姿」が見られるようになります。

なお、この姿は到達すべき目標ではないこと、個別に取り出されて指導されるものではないことに十分留意する必要があります。

また、幼児教育施設の保育者と小学校等の教職員が、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに子どもの姿を共有することが大切です。

## 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(10の姿)例

■ひとつの遊びの中にも、「10の姿」の視点がいっぱい



※「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(10の姿)は、「幼稚園、認定こども園、保育所の教育・保育要領・指針」と「小学校学習指導要領」で共通に示されています。

とりわけ①②③の姿を踏まえた「この日のAくんの保育記録」を見てみると・・・



- 年下の子と遊ぶ時には、やり方を教えたり、その子に合わせた対応をするなど、他者への思いやりをもって一緒に楽しめる姿が見られる。
- 雪質に違いがあることに気づき、友達を誘って、より大きな“かまくら”を作ろうと試行錯誤するなど、自然現象に興味をもって関わっている。
- 自分の思いや考えを友達に言葉で伝え、友達の提案にも耳を傾けながら、率先して遊びを展開する姿が見られる。

※上記は一例として記載しており、10の姿は個別に発達していくのではなく、相互に関連し合い、総合的に発達しているため、他にも様々な姿が見られます。

- ◆ **発達や学びの連続性**
  - 発達や学びは連続しており、幼児教育施設から小学校等への移行を円滑にする必要があります。
- ◆ **幼児教育施設と小学校等間での共有・理解**
  - 「10の姿」を手掛かりに、幼児の成長を共有し、幼児期から児童期への発達の流れを理解しましょう。
  - 互いの教育内容、指導方法の違いや共通点を理解しましょう。
    - ※相互理解のための方法例  
(合同研修会、相互の保育・授業参観等)
- ◆ **低学年は、幼児期に身に付けたことを生かしながら、教科等への学びにつなげる時期**
  - 小学校等は、スタートカリキュラムを編成し、指導方法を工夫し、円滑な接続を図りましょう。



幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	
健康な心と体	(幼児教育施設の)生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。
自立心	身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。
協同性	友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。
道徳性・規範意識の芽生え	友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。
社会生活との関わり	家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼児教育施設内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。
思考力の芽生え	身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。
自然との関わり・生命尊重	自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることを覚えるようになる。
数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚	遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。
言葉による伝え合い	保育者や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。
豊かな感性と表現	心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。



10の姿や後出の三つの柱は、個別に取り出して身に付けさせるものではなく、遊びを通しての総合的な指導を行う中で一体的に育んでいくことが重要です。

## 2 幼児教育と小学校教育

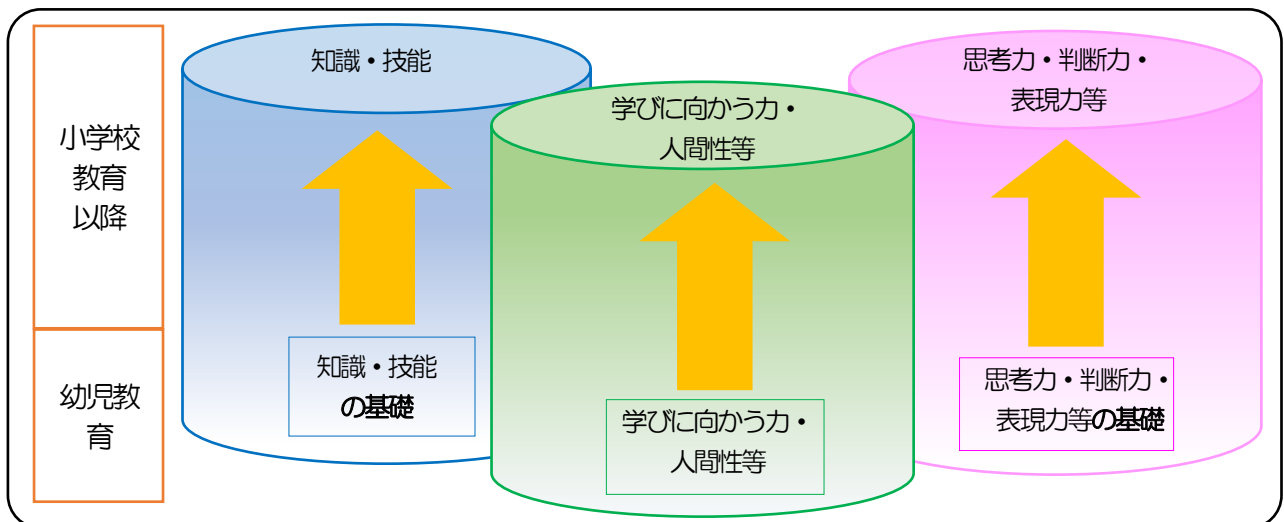
### (1) 幼児教育と小学校教育の違いとは

遊びの中での学びと各教科等の授業を通じた学習という違いがあるものの、子どもの発達や学びは幼児期と児童期でつながっていること、また、両者の教育の目的・目標が連続性・一貫性をもって構成されていることの前提に立つことが重要です。

	幼児教育	小学校教育
目 標	・「～を味わう」、「～を感じる」などのように、いわばその後の教育の方向付けを重視	・「～ができるようにする」といった具体的な目標への到達を重視
教育課程*	・5領域を総合的に学んでいく教育課程* 等 ・子どもの生活リズムに合わせた1日の流れ	・各教科等の学習内容を系統的に学ぶ教育課程* ・時間割に沿った1日の流れ
教 材	・身の回りの「人・もの・こと」が教材	・教科書が主たる教材
環境の構成*	・総合的に学んでいくために工夫された環境構成 等	・系統的に学ぶために工夫された学習環境 等

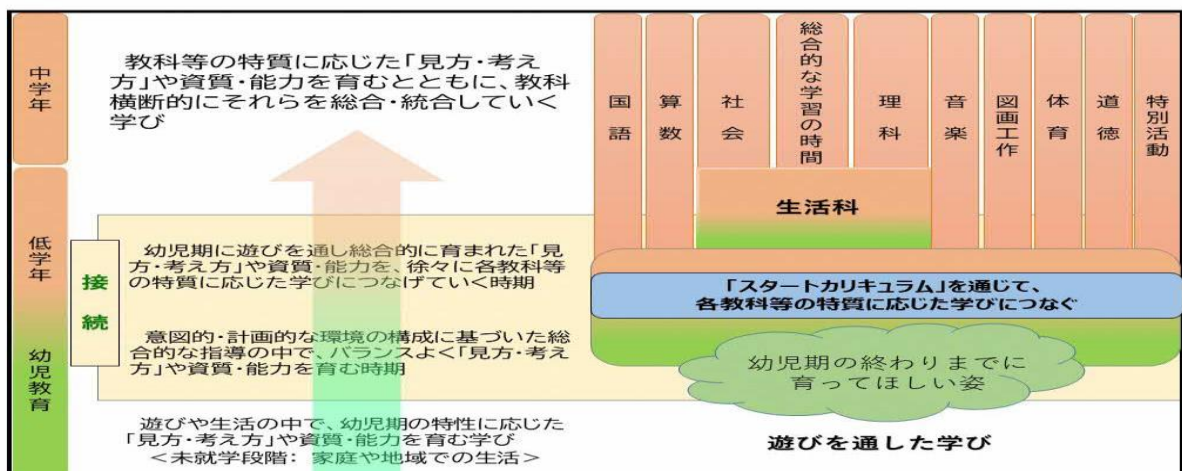
### (2) 育成を目指す資質・能力（三つの柱）\*

三つの柱は、幼児期から児童期、さらにその後の教育を通じて育むものです。



### (3) 幼児期から児童期までの教育イメージ

幼児期における遊びを通じた総合的な学びから生活科を中心とした各教科等における学習に円滑に移行し、主体的に自己を発揮しながらより自覚的な学び\* に向かうことが可能となるよう指導します。



### 3 幼児教育と小学校教育の連携・接続

#### (1) 連携・接続とは

**連携**とは、幼児教育施設と小学校等（組織）がつながり、幼児と児童及び保育者と教職員（人）がつながることです。

**接続**とは、幼児教育と小学校教育（教育・教育課程\*）が結ばれることです。

#### 《教育活動の接続イメージ》

A町では、地域資源である鮭を教材として、幼児教育から小学校教育を通じて、連続性・一貫性のある教育活動が展開されています。



水揚げのお絵かき

鮭鍋を調理



総合的な学習の時間  
鮭さばき3～6年

総合的な学習の時間  
燻製づくり5・6年



幼児の教育活動

児童の教育活動

鮭の稚魚放流、鮭の遡上見学、  
鮭のさばき見学など、園行事のほか、

幼児の興味・関心に応じて、  
鮭のお絵かき、鮭の歌と踊り、  
読書 など、遊びを通じた学び\*

スタート  
カリキュラム

1年 生活	秋を楽しむ
2年 国語	さけが大きくなるまで
3年 総合的な学習の時間	A町の自然
4年 社会	働く人とくらし
5年 総合的な学習の時間	A町で働く人たち
6年 理科	人や他の動物の体
全 特別活動	食に関する指導
全 道徳	生命の尊さ、郷土愛

幼児教育施設：  
小学校以降の教育や生涯にわたる学習とのつながりを見通しながら、幼児の自発的な活動としての遊びを通しての総合的な指導をする。

小学校：  
幼児期の終わりまでに育てほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施する。

## (2) 連携・接続の効果例

幼児教育施設と小学校等の連携・接続により、子どもがより生活の変化に適応しやすくなるとともに、次のような効果が考えられます。

幼児・児童の交流	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 幼児が小学校生活に親しみ期待を寄せたり、自分の近い将来を見通すことができるようになる。</li> <li>・ 児童が幼児に伝わるような言葉遣いやかわりを工夫したり、思いやりの心を育んだり、自分の成長に気付いたりする。</li> </ul>
保育者・教職員の交流	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 幼児児童の実態、教育内容や指導方法について相互理解を深めることにより、円滑な接続に向けた指導方法等の改善ができる。</li> <li>・ 義務教育修了までに子どもに育てる力という長期的な視点から、子どもの発達の段階に応じてそれぞれの施設が果たすべき役割について再認識できる。</li> </ul>
引継ぎ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 指導要録の活用等を通じて、小学校における個に応じたきめ細やかな指導の継続性が図られる。</li> </ul>
教育課程*等の編成、指導方法の工夫	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教育課程*等の編成や指導方法を工夫し、幼児教育と小学校教育との段差を小さくすることにより、子どもの生活の変化への戸惑いが減る。</li> </ul>

## (3) 道内市町村における幼小接続の状況

道内では、幼児教育施設と小学校等の交流については、進んでいるものの、接続を見通した教育課程\*の編成・実施は、十分に行われているとは言えないのが現状です。

チェックシートはステップ3・4を目指しています

連携から接続へと発展する大まかな目安

※平成22年11月11日「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力会議」で示された目安

ステップ0 : 連携の予定・計画がまだない。



市町村が連携の重要性を理解し、幼・小連携に向けた環境づくりを進めましょう。

ステップ1 : 連携・接続に着手したいが、まだ検討中である。



市町村等支援のもと幼・小の意見交換会を開催し、交流授業等へ発展させましょう。

ステップ2 : 年数回の授業、行事、研究会などの交流があるが、接続を見通した教育課程の編成・実施は行われていない。



交流授業等を年間指導計画へ。教委の支援で接続を見通した教育課程\*の編成を進めましょう。

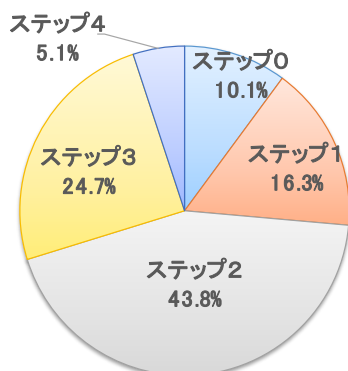
ステップ3 : 授業、行事、研究会などの交流が充実し、接続を見通した教育課程の編成・実施が行われている。



事後の反省・検証として、PDCAサイクル\*を確立し、次年度以降の改善へつなげましょう。

ステップ4 : 接続を見通して編成・実施された教育課程\*について、実施結果を踏まえ、更によりよいものとなるよう検討が行われている。

幼小接続の状況



※令和3年度道教委調

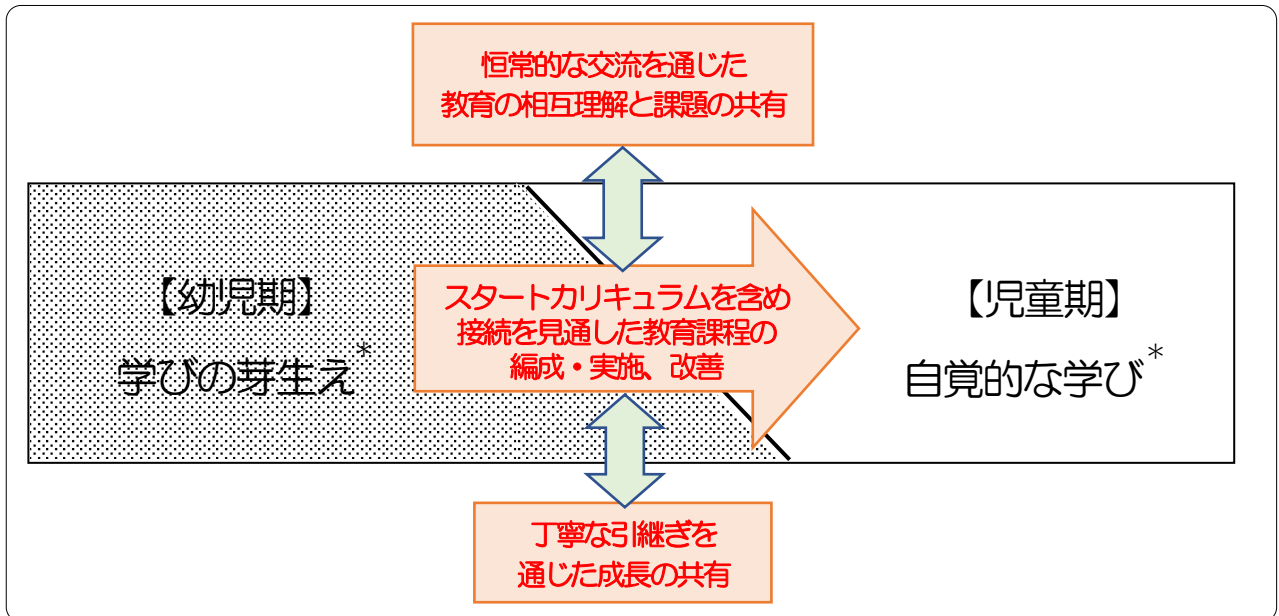
- ・ ステップ0～2と回答した市町村はH29調査147(86.9%)から125(70.2%)に減少。
- ・ ステップ3、ステップ4の割合は、H29調査に比べ増加。ただし、3割程度。
- ・ ステップ0も一定数(18自治体)存在。

意図的・計画的な連携・接続が不十分



(4) 学びの芽生え\*から自覚的な学び\*への円滑な移行のために

幼児期から児童期にかけては、学びの芽生え\*と自覚的な学び\*の両者の調和のとれた教育を展開することが必要です。円滑な移行のために交流や引継ぎ、スタートカリキュラムの作成について工夫しましょう。



(5) 連携・接続に当たっての留意点

幼児教育、小学校教育のどちらかがもう一方の教育に合わせるのではなく、

- それぞれの果たすべき役割を果たし、
- 相互に幼児児童の実態や指導方法等について理解を深め、
- 広い視野に立って幼児児童に対する連続性・一貫性のある教育を相互に協力して実施

することが大切です。

上記3つの項目について、第2章以降のツール（チェックポイント、事例）を活用し、幼児教育施設、小学校等、市町村をはじめとする各教育主体が力を合わせて、各地域における子どもの育ちと学びをつなげましょう！



・スタートカリキュラムとは

児童が義務教育の始まりにスムーズに適應していくことができるよう構成したカリキュラム。編成にあたっては、幼児教育施設と連携協力すること、学校全体での取り組みとすること等に留意。